

# 新日本歌人協会 九州・山口近県集会在阿蘇 実行委員会新聞

2013年4月20日号  
電子メール  
ohataya@gmail.com

## ようこそ、阿蘇へ

## 本日開会

九州・山口近県集会在阿蘇へ参加された皆さんを、実行委員会一同心から歓迎いたします。

遠い道のり、さぞお疲れだったと思います。どうぞ、雄大な阿蘇を舞台に、身体と心を解きほぐして、ゆったりと作歌に励んで下さいませ。

## 四国から

### 一〇名の参加

九州・山口近県集会という名称の通り、主に九州・山口在住の歌人が集う短歌の集いなのですが、今回は四国から一〇名の歌人が参加されました。これは、福岡県の一〇名と同数です。愛媛の大川史香さんをはじめとした四国歌人の勢いには圧倒されます。さて、本日の懇親会、即詠吟行会での活躍も期待されます。

## 鹿児島の佐伯さんから「ポンの差し入れ」

昨年の鹿児島・指宿での九州・山口近県集会の主催支部、鹿児島の佐伯靖子さんは、都合でどうしても参加できなくなり、大変残念がっておられました。その佐伯さんから、クール便でデコボンや島らつきのような差し入れをいただきました。皆さんで召し上がって下さいとのことですよ。

## ■素敵な手刷り「しおり」をどうぞ

実行委員の一人、版画家の奥山直人さんが、集会参加の記念として、オリジナル版画のしおりを一枚一枚丁寧に刷りました。

## ★当集会の県別参加者数 合計61名

- 四国(愛媛県8、徳島県1、高知県1)
- 福岡県(10名)
- 鹿児島県(6名)
- 宮崎県(5名)
- 佐賀県(4名)
- 山口市(3名)
- 大分県(1名)、静岡県(1名)、
- 東京都(1名)
- 熊本県(20名)

## 三つに分かれて

### 丁寧な合評会に

今回は、六二首の作品を三会場に分けて合評しますので、一首あたりの時間配分もたつぷり、丁寧な合評会が可能です。

## 合評会の進め方

二日九時〜二時

参加された皆さんで、順番に作品を読み上げ、読み上げた人がまず、その作品にコメントをします。その後、会場の皆さんで批評を続けます。最後に助言者が寸評をおこないます。

合評会がより充実したものになるよう、自由闊達な発言をお願いします。おおよそ、一首につき五分程度の進行を考えています。

## ■集合写真の撮影について

参加者全員の集合写真は、二日目に閉会式会場で、閉会式が始まる前に撮りますので、ご協力をよろしくお願いたします。撮った写真は、会計報告と共に皆さんへお送りします。

## 「3. 11東北を詠う」に思う

今夜の懇親会での熊本支部の出し物の「3. 11東北を詠う」は大畑靖夫さんが、震災の半年後に自らレンタカーを駆り、四日間で1400kmを走破して詠んだ二七首です。

どの歌も現場に立たなければ詠えない切実感あふれる作品に仕上がっています。歌と、その背景となる荒涼とした風景の映像とが見事にコラボレーションして、短歌の新たな可能性を見いだした想いです。

二年を過ぎ早、震災と原発事故が風化しつつある中、私たち歌人は、短歌という短詩形文学をとおして、少しでも風化に抗うことが重要だと、この集会を機にあらためて思います。

(文) 熊本支部実行委員 田川清



## 紹介 熊本の歌人が

### 詠った阿蘇 3

実行委員の寺内實さんが選

んだ地元歌人の秀歌です。

(由宇とし子歌集・天塵)

阿蘇山の霜道といふ瘦せ畑の畝間伝ひに走る小雲雀

浄界もここらまでなりまだ飛ばぬ雲雀をさなく草を走れば

文明はひしひしとしてまだ飛ばぬこの小雲雀も草より逐はむ

牧草の刈られて低き野を出づる百濟ほとけのごとく円月

(清田由井子歌集・夢やむらさき)

阿蘇原のしづけき雨に濡れ咲きて詩才つましき吾亦紅なり

草の名をいくばく覚えはた忘れとどのつまりの黒阿蘇に生く

ちりぬるを阿蘇のふもとに書かむとき汗などふかぬ眼が汗を吹く

(同・歌)

哭く月を阿蘇天心に棲まわせて枯野の夢をわれはみるなり

活火山据えてずっしり火の村に削ぎゆく鳥の肉うすきかな

ゆたかなる飢ゑのごとくに雪待てば阿蘇野は風に微笑せりけり

加害者の意識もすこしはるばるとわが棲む村は雪の香まとふ

花すすき旗にあらねどその白は秋風野路に悼のかたちか

一夜にて生れしといひし円き山夜峯を置きて村低きかな

折りふしにこころ尖れといふ声すれば傾ぎて根子の山の秀

(九州療養所・島田尺草)

朝戸くりて阿蘇は雪よとみとり女のつぐりは聞きぬ痰を切りつつ

(菊池恵楓園・伊藤保)

けふ一日山の麓にぬし雲の月に照りつつ起ち昇りゆく

戦争に力かさざりしとは何を言ふ木の葉を繙帯に巻き堪へて来にしを

義足はき友と苦しみて登り来し阿蘇山のうへにつつましく立つ

(菊池恵楓園・津田治子歌集)

病み崩えし身の置処なくふるさとを出でて来にけり老父を置きて

高原の萱野を月はてらしつつ火を噴き上ぐる今日の阿蘇山

青みたつ阿蘇連山の尾根越えて山焼の火の雲に近く燃ゆ

かなしみは身にしづまりぬ目交に雪の降りる阿蘇の山見ゆ

雪山の阿蘇に向へりうつしみの身を死なしめむこの思ひゆゑ

(松下紘一郎歌集・苔径)

阿蘇は雪の降るとう電話、外輪山の尾根見ゆる窓辺君は立つらし

雪消えし尾根はかすみて白雲の三つ四つ 天蓋ひろびろとあり

黄緑の茂りにこもる原生林ふかぶかと五月の北向山や

中岳は煙の見えず空蒼くこなた夜峰の岳尖るなり

裏阿蘇はひかりに満つる麓原石の猿田彦辻に在わせり

籠を背に坂くだりくる媼なり山巒ふかく蔭る麓を

連翹の花の匂うはかなしけれ咲く季となりて人は在わさず

笹群の笹の波うつ響のみ谷地はいつしか影のひろごり

バルコンに立ちてひとりの眺望は遠く噴煙を立たしむる阿蘇

山頂より見る高さにて幾重にも山は連なり遠く阿蘇も見ゆ